

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：13501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2016

課題番号：23720263

研究課題名(和文)ライフステージに伴う外国人妻のアイデンティティの変遷

研究課題名(英文)Changes in identities of foreign married women with life stages

研究代表者

伊藤 孝恵 (ITO, Takae)

山梨大学・総合研究部・准教授

研究者番号：10348104

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本人男性と結婚し、日本で暮らす外国人妻の、結婚や母国に対する認識について、ライフイベントとの関連を中心に調査を重ねてきた。調査協力者は、日本に中長期滞在する東アジア出身の女性2名で、それぞれ専業主婦と仕事をもつ母親である。調査の結果、いずれの調査協力者も、国や文化差を意識せずに生活していると答えた。ただし、周囲との人間関係に自分の「居場所」を見い出せない時や、出産による休職と退職に伴う自己喪失感がある時などには、否定的な感情を伴って、母国と日本との差異を強く意識していた。また、子育て環境の違いは、ライフイベントの有無や環境の変化に関わらず、感じていた。

研究成果の概要(英文)：In this study, I researched their cognitions of marriages and their home country focusing on the relation with their life events. The investigation cooperators are 2 females from East Asia who stay mid and long term in Japan, one is a full-time housewife and the other is a mother with work.

As a result of the investigation, both investigation cooperators replied that they are living matching Japan without being conscious of a country and the cultural difference between their husbands and entourage. But, they were conscious of the difference between the mother country and Japan as well as negative feeling hard when the good human relations can't be built in Japanese society and time with a missing self sense with layoff by childbearing and retirement. The difference in the child rearing environment was found in spite of a change in the environment.

研究分野：国際結婚

キーワード：国際結婚

1. 研究開始当初の背景

日本人男性と結婚して日本に生活拠点をもち、中長期に亘って日本で暮らす外国人妻には、アジア出身者が多い。彼女たちの中には、日本語に問題を抱えている者もいる一方で、言葉を含め、日本の生活に慣れ親しみ日本人と変わりなく生活しているように見える者もいる。従来の研究においては、主に前者の外国人妻の問題に焦点が置かれてきた感があるが、日本に適應しているかに見える後者の場合はその実態はどのようなのだろうか。

外国人妻に限らず、日本に定住するアジア出身の外国人には、周囲から日本語によるコミュニケーション力が求められる。コミュニケーションには、言語力に加え、適切な対人行動をとるスキルも必要である。外国人にとって日本社会で自明のこととして暗黙のうちに関わりの間で共有されている価値観や習慣に則った行動を理解し、自らも実践するのは、困難な場合がある。また、日本語や日本的な価値観・習慣といったものが、家庭の中でも求められ、我が子への母語や母文化継承を願う母親にプレッシャーを強いていることも指摘されている。また、初めて経験する日本の学校文化において、子どもの学校行事の準備や集まりへの戸惑いも聞かれる。子どもの順応性に母親が対応しきれず、「日本のことが分からない外国人」として、母子間に微妙な信頼関係の揺らぎを生むことにつながりかねない。

このように、日本語もでき、周囲の日本人との間で友好的な人間関係を築き、日本社会に順応しているように見える外国人妻に対し、周囲は日本人と変わりなく接していることが多い。しかしそこには、彼女たちの母語や母文化を意識的、あるいは無意識に隠したり、押し殺していたりして、日本人への「同化」を余儀なくされていることはないだろうか。

そのような疑問に立ち、本研究では、外国人妻の心情を探るべく、数回に亘って聞き取り調査を行った。

2. 研究の目的

本研究は、日本人と結婚し日本に居住する外国出身の女性（以下、外国人妻）の、個人（自己）並びに出身国・文化に対するアイデンティティについて、彼女たちのライフステージに合わせ縦断的にその変遷を追っていく中の一端に位置づけられる。縦断調査を通じて

、外国人妻のアイデンティティの変化及び、それに関与すると思われる環境を明らかにし、彼女たちの家庭や社会への関わり方や、所謂「国際児童・生徒」と呼ばれる子どもたちへの教育的戦略・態度に与える影響の個別性と多様性について考察することを研究目的とする。

本研究の調査・分析対象者である2名の東アジア出身の外国人妻に対しては、長期に亘る調査協力への理解と承諾を得ており、平成22年8月にパイロット調査を実施済みである。本研究では、平成22年10月時点でそれぞれ「就学児童と未就学児童のいるライフステージ」（外国人妻A）と、「妊娠・就業しているライフステージ」（外国人妻B）にある2名に対し、3年間の生活環境や対人関係、自己及び出身国・文化に対する心的構造を調査士、アイデンティティと環境の適合性を明らかにすることを目的とする。従来あまり注目されなかった個人と環境との適合性に注目し、個人と環境の関係から生じる心的構造を、各々のライフステージに応じ縦断的に追跡していくことで、環境とアイデンティティとの関連を一貫性をもって見ていくことが期待できる。

3. 研究の方法

調査協力者は、日本に中長期滞在する東アジア出身の女性2名で、それぞれ専業主婦として生活している。調査方法は、子どもが成長段階やライフステージに応じて聞き取り調査を行う「ライフインタビュー」とは、調査協力が既にかつ結婚、出産を経験し、子育てや子どもの進級・進学と関係が深まり、調査協力が得られた段階で聞き取り調査を行った。また、調査協力者は、録音をし、それを文字起こしした。調査協力者の個人情報管理には十分気を配り、報告を研究以外で公表し、論文等で

み2012が狭種とよ係う伴のねに20とが一だが関よにど重う、に容て一係なのれがをよ年A受っジ関等どそイ査る、のあテ友対が、テ調す2010の観にラ交でAえイ、拠2010の値会トの間、捉テか、依は見価社スAのでをンのに勢にや域の後と中違デるイ姿も慣地め今困く相イす。テのと習のた。周いのア容い。ッ母りらにしか中教生だの外りれな母らで子はイこ年本のうりて化的変た一れるがたでの国語3国家んしとなしが介る。2012年に疑換語で優しとていたせ2010年のア、段が会つ学た要中え(2007・文家テ。両様日応よがけ文化的変た一口かす化も語と中小がっを国いす理自れ広た。がや方自い意中よち変所あはAえへっそつ伴なをに力たおムンるの多な適え広築両文ういオ聞関変ど国ちり時分嫌の中しりに、そがれれの方ののるを人母向で見た母文も適。ぞら、子え待し鈴るつデえ年て隘のいりがにいよてフでにい子中たた当自をす「かたもやば係らそ分教は理思で、イたの場で承も支会あが見にの語も能いにズ

因係き教ち態得、と。役まっつので親えと會てししうでてやで中會っ人のテれ、一り学つかののでに分為起行算扱ト文の自イ起関働をも状取めると。たスれかわとし母い人社しと与のイし室人と、やい住上Aイそはワや、人行話容時自行生の(のや本か「アく友は語をた許始めじラこな味人とのと日本と人関係アと教国こり文化とのジ、場合ムのり、は、いながらもと日るて、アき交に国りい免い始生クでれを知部期るの日日識、中き間化項卓はなん国合地ててあの場一分ああ日方、はも人な動んどこで守い化る。大、年中がて車通えがの中らび・一てあの、意、大人文る、にいし中しじスイで、のち自でにち一受にて。れ情ないてい子いるを築文る。大、年中がて車通えがの中らび・一てあの、意、大人文る、にいし中しじスイで、のち自でにち一受にて。れ情ないてい子いるを築文あ最の2010、なめ動に教化校の得喜人の育であの、意、大人文る、にいし中しじスイで、のち自でにち一受にて。れ情ないてい子いるを築文でにる。2010、なめ動に教化校の得喜人の育であの、意、大人文る、にいし中しじスイで、のち自でにち一受にて。れ情ないてい子いるを築文識化れるも社会いに球国境もの活できた生、徴、周りがする。は、大人文る、にいし中しじスイで、のち自でにち一受にて。れ情ないてい子いるを築文意識変らあが社思年卓中環どそ育がう等意識の(2000)、が定れの識験」識ののしをじに、同に的いの仕事の調にたAする達とたさと不向れ場合、自堤」たのえで信でう12、でな子、強こ味意識の(2000)、が定れの識験」識ののしをじに、同に的いの仕事の調にたAする達とたさと不向れ場合、自堤」っ境考り自とい12、でな子、強こ味意識の(2000)、が定れの識験」識ののしをじに、同に的いの仕事の調にたAする達とたさと不向れ場合、自堤」か心とがること、機が大にな家会るやす生活澤意きたで自思役イっ語自。の情仲てた心現れての目自経、偏・取り内容縮意すの(1995)、納起の波的人なふる広出るいら契れうらにの社い係視生(の)に働こてたちン拳中ああ国社たと立表イにほク方びまら知やきAがにし、動浦いラ化よ分れこすのにえたかをそいさ員でたて関重の(の)に働こてたちン拳中ああ国社たと立表イにほク方びまら知やきAがにし、動浦いラ化よ分

のえ経性でも存いすうイめ中継な思
 の間のさ子依家いる的け庭語精神め
 身て時も正はがはなれ化受家母精た
 出い、ど修にい私はさ文に、でもる
 化つし子て心願「で徴の的でまてい
 文にとるっ本のが人象己定とてくて
 異育るすよの得る国に自肯こしなれ
 に教わ化にA習れ中りでをた突がた
 特、関変態。語わが語中イっ衝性保
 化、にに状う国思分うのテナと要が
 親文接も・い中と自い会イにも必ス
 、や密と応とにる、と社テうどるンる
 は語がと反くちす時、ンよ子すラれ田
 化言方過やいた在るねにデるで承バわ
 武少国ヤるてと会て「従れ賽際
 的含子据お違な階い及ぼ母もはA
 伴方いとアーテもイけ自がこ事
 例は

ののチいえ困社きをとらる。国動を、見
 者どルてあ周本生況」えいの受得てを、
 住ん力っが、日を状化捉て身の習立像を、
 居とノ育妻ずて程た同にし出来語を来る
 人ほもて人せし過しな同的呈国従言語を
 国はがし国張避応う的批判を中、戦のて
 外でもと外主回避う的批判を中、戦のて
 、村ど」、ををな、一ら疑たい直教自
 は農子人て化擦的しのかにまつ見にた
)やの本い文摩的しのかにまつ見にた
 10)方者日つ母な戦指化研究こ)性方体
 20)地婚「にや要でと文研た11)女え主
 10)方者日つ母な戦指化研究こ)性方体
 20)地婚「にや要でと文研た11)女え主
 10)方者日つ母な戦指化研究こ)性方体
 20)地婚「にや要でと文研た11)女え主

イや人容でがンる係見うしさん出に合意も
 ア時の受的とデす関意いう得デに会場は
 、る々の質こイ化間、とそ納イい社るイ
 くれ時化変るア在人情、・ア合、いテと
 なさの文るあ顕な心なく、解的きにテ
 は化そやすで化で衡やい多理引逆れテ
 意識、己化の文上均力てがに文ば。さん
 の意は自変も、の不能れ場合身、しる容
 もがどのてなも識ののさ場自てばあ受
 なイな困っどか意と己容く分ししがア
 的テ境周よッしが困自受づ自とはと己
 遍イ心やにリ。イ周てに基を段イこ自
 普テ、係どづるテ、い困に況手テる文
 でン況関ないかイはお周識状るイれい
 一テ状間度八分テのにが認たせテさお
 識自の母にを化のり下ら

5. 主な発表論文等
 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

- [雑誌論文](計 0 件)
- [学会発表](計 0 件)
- [図書](計 0 件)

[その他]
 山梨大学研究者総覧
 URL:<http://nerdb-re.yamanashi.ac.jp/Profiles/340/0033931/profile.html>

6. 研究組織
 (1)研究代表者
 伊藤 孝恵 (ITO, Takae)
 山梨大学・総合研究部・准教授

研究者番号: 10348104